
クリエイトサモナー

ヴェルム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クリエイトサモナー

【Nコード】

N1640BA

【作者名】

ヴェルム

【あらすじ】

命を狙われ異世界に飛ばされてしまった神城カケル。そこにはゲームや漫画で見たことのない世界が広がっていた。カケルはその世界で生きる為、そして元の世界に戻る為に奮闘し、自身に与えられた力をどう使い、生きていくのだろうか。

プロローグ（前書き）

皆さんはじめまして。ヴェルムと申します。

小説を書くのがこれが始めてということもあり、至る所未熟で不愉快にさせてしまうこともあるかもしれませんが、暖かい眼差しで見ただけだと幸いです。

それではどうぞ

プロローグ

- ??? - - ??? - - ?時?分 -

僕には約束があつた。

だけどそれを守るための力が無かつた。

そのために努力に努力を積み重ねてきた。

例え才能がないと罵られようともひたすら足掻いてきた。

だが決して届くことはなく。

いつしか記憶からぼつかり穴が空いたように忘れてしまった。

心の底のどこかで彼女とまた出会えることを望んで。

- 神城カケル - - 2 - B教室 - - 10時44分 -

「ほーらーお前ら早く席つけー帰りたいだろーてか俺が帰りたいんだよねえ…職員会議とかやってられないっていうの」

ヤル気ゼロ、金運ゼロ、恋愛運ゼロ、加^か齢^{れい}臭^{いしゅう}の死んだ目をしている

担任の長谷川^{はせがわ} マルコ(男)が気だるそうに言った。

だが生徒たちはそんなことはお構いなしに喋っていたり、雑誌を読んでいたりにして好き勝手やっている。

マルコのコメカミにピキツと血管が浮き、ボサボサの髪をくしゃくしゃと掻き、両手を組む。

「えーっと…なんだ、明日から冬休みだけど別にクリスマスに彼女と過ごそうが、

大晦日にドンチャン騒ぎしようが、海に飛び込んで溺死できししようが別にどうだっていいんだけど、

警察沙汰になるようなことはやめてくれよなあ。

貴重な休暇を削ってまでお前らの面倒みんのマジつらいんだわ、いやマジで」

そう言うと大きさに両手を上げ、生徒たちに懇願こんがんするように見つめる。

が、生徒たちは一切聞く耳持たず、拳句にはカバンを手に取り帰る。だす者まで現れ、

教室内の秩序は修復困難の崩壊への道を辿っていた。

そんな中、僕は教室の一番後ろの窓際という一番人気の誰もが羨む席で、外面状大人しく座って担任の話を真面目に聞いている生徒を演じていた。

（早く初回限定版クリエイトサモナーを手に入れてメフィストドラゴン作りてえ！ それにゲオルグナイトも捨てがたい！ しかしフアントムウルフも…うーむ）

クリエイトサモナー それはゲームのジャンルはアクションSRPGに分類され、

オリジナルの魔物や精霊を創り出し召喚して戦わせて育て、最強のサモナーを目指すというゲームだ。

そしてそれ以外にもお店を経営したり、学校に通ったり、ずっと自宅の工房に引き籠ってひたすらオリジナルの魔物を創ったり出来たりと自由度の高さから、体験版を公開した4ヶ月前から空前絶後の注目を集めている。

そして今日がそのクリエイトサモナーの発売日であり、何よりも明日から冬休みなのである。ひたすらゲームにのめり込むことが出来るのだ。

頭の中ではどのような魔物を作ろうか試行錯誤に夢中で、時折顔がにやけていたが、恐らくバレてないだろう。

ふと担任のマルコのほうに意識を向けてみると

「ふう…こんなことやりたくなかったんだけど」

教卓の横に置いてある紙袋から、演劇部 持ち出し厳禁の文字が書いてある拡声器取り出すと担任のマルコはそれにスイッチを入れると死にかけの目のハイライトが蘇り、すうっと思いつきり息を吸い、拡声器を口にあてると

「てめええええら！！ いい加減にしやがれ！！ お前らがなんか問題起こしたら誰が尻拭いすると思つてやがんだ！！」

両親か？ 警察か？ 違えだろうがあっ！？ ああっ！？ この俺だろう！！

いいかお前ら…もし問題起こして俺の休日が台無しになったらな…お前らの小さくて汚ねえケツんなかにぶっとい工業用のドリルぶち込んで奥歯の虫歯を治療してやるからな！！ 覚えとけ！！」

そう言つて荒れ狂う獅子のように教卓を倒し、チョークを辺りにぶ

ちまけると教室を出て行った。
出て行くとき一瞬だけどこちらを見ていたような気がしたが気のせいだろう。

シーンと先ほどまで騒いでいたことが嘘のように静まり返る教室。
みんな何が起こったのか状況把握出来ていないようだった。あのヤル気ゼロ、金運ゼロ、恋愛運ゼロ、加齢臭の死んだ目をしているマルコがあんなことを言ったのだ、無理もない。

「な、何か今日のマルコおかしくね？」「だ、だよーあんなマルコはじめてみた」

「てかマジうつせーし」「でもあれはヤバイって絶対人殺す雰囲気だったよ」

「な、なあ今日ラウンドツーいらないか？」「おっけー、先飯食おうぜ」

「なあなあ今朝のあの子マジでかわいかったよな」「だよなー今のご時勢あんな美少女がいるなんて付き合えたらオレ死んでもいい！」「ばっきやるーっ！ 女の娘は二次限定っしょっ！」

「帰る帰る…」

誰にも聞こえる筈のない小さな声で呟き、ゆっくりと腰をあげ席を立ち上がるうとした瞬間

「ッ!？」

心臓が茨の棘で締め付けられる様な痛みと足の爪先から頭部の天辺

に電撃が走る痛みを感じ、
体の平衡感覚^{へいこうかんかく}を失い力なく床に倒れてしまう。

たすけて

僕の頭の中に透き通るように綺麗でクリアな女性の声が響く。

おねがい このままじゃ世界が

張り詰めた悲痛の声でこちらに語りかける。

おねがい はやくここに カケ

なにか言い掛けようとしたがそれを遮るように 禍々しく、ドス黒い醜悪^{みにく}に満ち溢れた声が頭に響く

ああ美味そうだ 今回ののは実に美味そうだ 早く来いよ ”カ
ケルくん”

そこで僕の意識が落ちた。

- アリア・セフィロト - - ユツフェンホーグの森 - - 11時0
5分 -

「あゝあ…課題の材料は切らしちゃうし、お店はお祭りの準備で閉

まってるし…それに何でよりもよって今日は”ザファンの日”なのよ…」

太陽も天高く登っている時間だというのにも関わらず、薄暗く湿気でジメジメとしている森の中を私は一人で愚痴を零しながら歩いていた。

人の顔に見える紫色をした今にも動いてしまいそうな樹木や、クケケツと気味の悪い声を放ちながら辺り飛び回る鳥を4メートルはあるつかというひょうたん型の食肉植物が蔓を伸ばし捕まえ上部にある口に放り込む食事する等といった光景を目にし、より一層この森の不気味さを増している。

「きゃっ！」
足を滑らせお尻を軽く地面にぶつけてしまう

「いったー！　もつなによんなのよ！　ってこれってまさかっ！」
宝を見つけかのように目を輝かせて足場の植物を手に取りじつくりと見てみた。

「うん間違いない、ニヤルホムレンだわ」

ニヤルホムレン　それは一見するとそこら辺に生えているただの雑草のように見えるが、特徴は葉脈（しんみゃく）にうっすらと赤い筋が入っていて葉に衝撃を感じると透明の粘膜を分泌することだ。

理由はわからないが一説には自身を守るための防衛と言われている。乾燥させて煎（せん）じて飲めば解熱と解毒の効果を持ち、刻んで団子状にして飲み込めば滋養強壯（じゆうかうちゆう）にもなったり、はたまた高級石鹼（せきけん）の材料にもなったりといういろいろなことに需要があり、

ランクでいうとS A B C D E F GのDランク相当の貴重な植物だ。

ちなみにGランクは魔物で例えるとスライム、ゴブリンといったものでCクラスになるとドラゴン、ロードヴァンパイアなどといった50人の一般の王国兵士が束になっても勝てないものになる。

「これはちょっと、いやとても異常よね。まさかこんな奥にこんな」

周りを見渡すとそこには一面にニアルホルムレンが異常繁殖していた。本来この植物は繁殖する絶対数が少なく、人工繁殖に成功したことがないのだ。

それ故に貴重でランクが高くここまで繁殖しているところを目の当たりにすることはまずない。

「持って帰れるだけ持って行きたいけど一人じゃ無理そうね、それに何だか嫌な胸騒ぎがする。いったん帰って報告しないと」

羽織っているマントの懐から長さ30センチ程の杖を取り出して軽く両手を前にして構える

「Zetha Orun Half Matha Chagoll
Alia Alia Alia . . . (レビティション)」

詠唱を終えると、体が地面から数センチ浮いたことを軽く確認すると、地面を軽く蹴り、空中に飛び上がる。

Fランクの呪文「レビティション」で、発動自体それ程困難ではないのだが、維持するのに上手く自身の魔力をコントロールしないと、呪文が解けてしまい地面に落下してしまうのだ。

突如周りの空気がガラッと変わり、魔物特有の臭気が漂い空気中のマナが淀む。

「あらら、さっきの魔術で場所が見つかられたようね…事前に”リスキャン”しておけば…」

軽く落胆した様子で自身の失敗を悔いているが今はそれも言っていない様だ。

何も無い空間から亀裂が走り、その中から人のものとは思えない手が亀裂と亀裂を掴み広げ、キーンツと

耳を劈く覆いたくなるような衝撃音がなると同時に、空間が割れ中から我先にと魔物が雪崩れこんで来た。

そこにはGクラスのゴブリン、スライム、ワームが数十匹Fクラスのミノタウロスが二、三匹が私の周りを囲んで行く手を遮ぎり、魔物がお互いを牽制しあいこちらの動向を窺っていた。

無理もないだろう、人間というのは魔物にとってはほとんど無い御馳走であり、上位種に進化するために必要な鍵でもあるのだから。

「ちょっと数匹程度なら何とかなるんだけど数が多すぎる…逃げ切れるかしら私、ううん今は生き残ることだけを考えないと！」

- 神城カケル - - 駅構内 - - 11時11分 -

「1111は…?」

目を開け、辛うじて一番最初に目についたのは藤崎ヶ丘駅の行き先案内板という物で先ほどの教室とはいつてかわる見慣れない光景が広がっていた。

「おーもう大丈夫か神城、いやー参ったよな貧血だつて、安心しろよもう大丈夫だ」

声の主に向けようとするが首が石のように固まって動くことができない。

「オマエも災難だよなうんうん、でもま仕方ないよな最初の人間だし」

「最初の人間…？あんたはいつたい」

激しい嘔吐感と心臓を手で鷲掴みにされる苦しさが僕の体を襲う。しかし首だけで飽き足らず、今度は指の一本さえ動かすことができなかった。

「オマエ生きるとって何かわかるか？人はなぜ生きてどうして死んでいくかわかるか？まあただの小僧にわかるわけないか」

肩をガツシリと強く掴まれ、僕の体の震えが止まらなくなる。体が危険信号を出していて、この状況は非常に危ないと警告している。

『まもなく4番乗り…に…界行き…直通…急が通過し…す危険で…ので黄色い…内側に下…てお…ちくださ…』

(あれ、なんでかよく聞こえないや…でもとても嫌な予感がする)

「そんじゃいつちよ片道切符の天国に逝って来い！　グッドラック
！」

背中を思いっきり押されホームから線路の上へと追いやられてしま
う。

（あれ…体が浮いてる？　ああ押されたんだ僕は、でもいったい誰
が僕をこんな目に…）

体がゆっくりと回転していく。

（人って死ぬ間際、思考が長くなるって本当なんだな、なんでだろ
う死ぬのが怖いのに怖いと思えないやおかしいだろこれって…矛盾
してるだろ…）

そして電車が僕の目の前に迫ってきたとき、突き落とした人物を見
て恐怖する。

そこには口が裂けそうなくらいに口角をチェシヤ猫のように吊り上
げ、目をパツチリ開きこちらを見つめてケラケラと笑う

”長谷川マルコの姿があったのだから”

プロローグ（後書き）

感想お待ちしております

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1640ba/>

クリエイトサモナー

2012年1月4日03時47分発行